富山高専主催のバレーボール教室イベント参加者における満足度分析

中村祐太郎*

Satisfaction analysis of participants in volleyball classes organized by Toyama KOSEN

NAKAMURA Yutaro*

In recent years, various problems related to school club activities have come to light. The transition of school club activities to the local community is being promoted, and the place for children to play sports is shifting from school to the local community. Under such circumstances, Toyama KOSEN held a volleyball class organized by the volleyball club for three days from August 18 to 20, 2023. The purpose of this study was to clarify the level of satisfaction of those who participated in the volleyball class, and to obtain data that will contribute to the development of junior sports. The results of the survey revealed the following:

1) The overall satisfaction level of the participants was high throughout the three days of the volleyball class.
2) The volleyball class was highly rated in terms of technical instruction, location, time of implementation, and continuity of the program over the three days.
3) The volleyball class on the first day received the highest satisfaction ratings for the most items, indicating that inviting famous players as instructors is an important factor.
4) The satisfaction level also varied depending on the environmental aspects of the volleyball class, such as the facility.

キーワード：バレーボール教室，地域貢献，満足度，運動部活動

1．はじめに

近年，我が国では学校部活動に関し，教員の働き方改革や体罰の側面などから様々な問題点や課題が浮き彫りとなっている．このような社会的環境の変化の中，ここ数年では学校部活動の地域移行化が推進され，子どもたちのスポーツの場が学校から地域へと移り変わっている．学校部活動改革に関する提言として，スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では，生徒に望ましいスポーツ環境を構築する観点に立ち，運動部活動がバランスのとれた心身の成長等を重視し，地域，学校，競技種目等に応じた多様な形で，最適に実施されることを目指している．さらに，生徒のスポーツ環境の充実の観点から，学校や地域の実態に応じて，スポーツ団体，保護者，民間事業者等の協力の下，学校と地域が協働・融合した形での地域におけるスポーツ環境整備を進めることとしている[(8)]．また，スポーツ庁の「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」では休日の部活動の段階的な地域移行を図るとともに，休日の部活動を望まない教師が休日の部活動に従事しないこととすることを定めるなど，教員の働き方改革の側面からもスポ

* 一般教養科
e-mail: nakamura-y@nc-toyama.ac.jp

 （令和 6 年 1 月 19 日受付）

ーツ庁の提言がなされている[9]. このように, 学校における部活動については学校の課外活動としての枠組みから徐々に地域の手に移行していることがいえ, 令和 3 年度からは予算事業の面からも地域運動部活動活動推進事業として 2 億円が計上され, 休日の部活動の段階的な地域移行や合理的で効率的な部活動として推進しようとしている[10]. このような流れを受け, 現在, 国内各地で学校部活動の地域移行が図られた報告がいくつかみられる. 青柳は小学校における運動部活動をスポーツ少年団へ移行した際の変化について報告しており, 活動や指導・運営の内容, 教員, 子ども, 保護者に関して教員自身が変化に対する実感を得ていることを明らかにしている[2]. また, 赤堀はバスケットボールを対象に部活動と連携した地域スポーツクラブを実際に設立し, 所属選手ならびに保護者に対する調査を実施しており, 地域スポーツクラブの設立前よりも設立後の方が部活動に対する肯定的な意見が多くなったことが報告されている[1]. この他にも運動部活動の地域移行を報告した研究はここ数年で増加傾向にあり, 成果や課題に関するエビデンス蓄積が図られている[3][4][5].

そのような中, 富山高等専門学校（以下, 富山高専）では小中学生のジュニア世代を対象にバレーボール教室を通した地域貢献事業を企画し実施している. 本事業は宮城県で活動しているジュニアバレーボールクラブであるNPO法人TEAMi[11]との連携により実現し, 2023 年 8 月のバレーボール教室（サマーキャンプ）を皮切りに継続的な事業として展開している. また, この事業は 2023 年 12 月より「i class TOYAMA」として命名発足し, 筆者である富山高専バレーボール部顧問に加え, バレーボール部所属学生が中心となり事業のマネジメント, コーチングにあたっており, 高専という枠組みではスポーツを通した地域貢献事業として非常に珍しいものであると推察できる.

本報告の目的は, 富山高専が主催し実施したバレーボール教室を通した地域貢献が, 参加者にとってどの程度の満足度を示しているのかを明らかにすることで, 今後の事業展開の方法ならびにジュニアスポーツの発展に寄与する一資料を得ることにある. 高専という枠組みでスポーツを通した地域貢献は非常に珍しいことが考えられるため, 今回の報告を通し広く本事業を周知したい.

2. 方法

2.1 調査対象者および調査方法

本研究では 2023 年 8 月 18 日～20 日に開催したバレーボール教室（サマーキャンプ）の参加者を対象に, 参加後アンケート調査を行った. 今回のバレーボール教室は3 日間のうち 2 日間は外部より講師を招聘し指導を行った. 8 月 18 日は前述した協力団体であるNPO 法人 TEAMi のクラブ出身者であり, リオデジャネイロオリンピック女子日本代表の佐藤あり紗氏, 8 月 19 日は協力団体である NPO 法人の理事長である板垣光則氏, 8 月 20 日は富山高専のバレーボール部員がそれぞれ務めた. 調査はそれぞれの開催日に参加した参加者を対象とし, 回収数は 8 月 18 日が 31 名, 8 月 19 日が 20 名, 8 月 20 日が 9 名の計 60 名であり, その全てを有効回答として用いた. 倫理的配慮として, アンケート調査冒頭に本調査の趣旨説明ならびに回答者のプライバシー保護, 他の機関への漏洩, 目的外使用を一切行わないことを記載し, 同意できる者にのみ回答を依頼した.

調査項目は先行研究[6][7]における調査, 尺度を参考に質問項目の設定設定を行った. 具体的には学年や自身の主観的な技術レベル, バレーボール歴, ポジションなどの個人的属性, バレーボール教室に参加した総合的な満足度および指導内容, 受講環境, 実施時間などのバレーボール教室実施に関する項目であった. バレーボール教室実施に関する項目については後の分析で活用するため, 否定的選択を 1, 肯定的選択を 5 とした 5 段階リッカートタイプ尺度を援用し数値化することとした.

2.2 分析方法

まず, 個人的属性については, 調査データを単純集計し, サンプル数および割合を求め, それらを表にまとめた. 次に, バレーボール教室実施に関する項目では参加者全体の平均値を求めたほか, 各開催日の

参加者毎に平均値を算出し，一元配置分散分析（有意な差がみられた項目においてはその後 scheffe による多重比較）を用いて各項目における平均値の差を検証した．なお，これらの統計処理については IBM SPSS Statistics 統計解析ソフト V27 を用いており，本研究における統計的な有意水準は 5%とした．

3．結果および考察

3.1 バレーボール教室参加者の個人的属性

回答者の個人的属性は表 1 の通りである．今回のバレーボール教室は 3 日間にわたって実施され，参加者およびアンケート調査回答者については 1 日目 31 名（51.7%），2 日目 20 名（33.3%），3 日目 9 名（15.0%）と 1 日目が最も多かった．1 日目のバレーボール教室ではリオデジャネイロオリンピック女子日本代表である佐藤あり紗氏が講師を務めたことから，その知名度および講師の認知度が少なからず影響したことが考えられる．また，2 日目についても協力団体である NPO 法人 TEAMi 理事長板垣光則氏が講師を務めたことから，普段指導を経験できないような講師陣に対して，参加者自身も魅力を感じ，より多くの参加に結びついたものと考えられる．学年については小学生が 4 名（6.7%），中学 1 年生が 26 名（43.3%），中学 2 年生が 20 名（33.3%），中学 3 年生が 8 名（13.3%）と，中学 1･2 年生を中心としながらも小学生や中体連の活動を引退した中学 3 年生も参加しており，幅広い学年の選手の参加がみられた．実際に部活動の中心となっている学年だけでなく，中学 3 年生の参加者もみられたことは今後のバレーボール競技の継続の視点にも寄与していることが窺える．また，主観的な自己の技術レベルでは初級が 14 名（23.3%），初中級が 12 名（20.0%），中級が 23 名（38.3%），中上級が 5 名（8.3%），上級が 2 名（3.3%）であった．自己の技術レベルを主観的に評価することは困難な場合も予測されるが，中級であると感じる者を中心に初級者から上級者まで幅広い技術レベルの参加者が集まっていたことが推察できる．さらに，ポジションについてもレフト 13 名（21.7%），ライト 7 名（11.7%），センター12 名（20.0%），セッター7 名（11.7%），リベロ 6 名（10.0%）と，こちらもポジションに大きな偏りが生じることなく様々なポジションを経験している選手が集まっていた．最後にバレーボール歴は45.0±30.4カ月であり，中学校に入ってから部活を始めた参加者，小学校からバレーボールを始め中学校でも継続している参加者など多様に存在していたことが推察される．以上のことより，今回のバレーボール教室参加者については中学校 1･2 年生を中心としながらも様々な技術レベル，ポジション，バレーボール歴の選手が参加していたことが示唆された．

3.2 バレーボール教室参加者の満足度について

参加者全体のバレーボール教室実施に関する各項目の満足度は表 2 の通りである．総合的な満足度については 4.63 と非常に高い値を示していた．また，

表 1. バレーボール教室参加者の基本的属性

		n（%）			n（%）
参加日程	1日目（8月18日）	31(51.7%)	ポジション	レフト	13(21.7%)
	2日目（8月19日）	20(33.3%)		ライト	7(11.7%)
	3日目（8月20日）	9(15.0%)		センター	12(20.0%)
学年	小学生	4(6.7%)		セッター	7(11.7%)
	中学1年生	26(43.3%)		リベロ	6(10.0%)
	中学2年生	20(33.3%)		その他	3(5.0%)
	中学3年生	8(13.3%)			
自己の技術レベル	初級	14(23.3%)	バレーボール歴		45.0±30.4（月）
	初中級	12(20.0%)			
	中級	23(38.3%)			
	中上級	5(8.3%)			
	上級	2(3.3%)			

バレーボール教室における各項目の満足度について，「会場の立地は良かったか」の項目が 4.80 と最も高い値を示していたほか，「技術の指導はわかりやすかったか」では 4.75，「会場内の環境は良かったと思うか」では 4.73，「実施時間はちょうど良かったか」では 4.60 とバレーボール教室開催に伴う，講師の質，環境面，実施時間の長さなどのバレーボール教室の枠組みとしては非常に高い満足度を示していた．また，「今回のバレーボール教室に参加して良かったと思うか」の質問では 4.78，「今回の教室で学んだことは今後に活かせると思うか」では 4.73，「今後もこのようなバレーボール教室を行なってほしいと思うか」では 4.68 と，今回のバレーボール教室に参加したことの良さが示されただけでなく，参加選手自身が今後のバレーボール競技継続においてプラスの成果を収めた実感がみられるという結果となった．さらには，今後もこのようなバレーボール教室の展開を望む結果を示していたことから，少なくとも一定のニーズは存在していることが窺え，本事業のような形態のバレーボール教室の実施について今後も発展的に行なっていくことが求められる．一方，「講師の方とうまくコミュニケーションが取れたか」という項目では，4.56 と著しく低い値を示したわけではないものの，本調査項目の中では最も低い数値を示していた．今回のバレーボール教室では多くの人数が一堂に参加し練習を展開していたことから，1 人 1 人の選手とのコミュニケーションを図ることは困難となっていたことが予想できる．そのような状況より，今後は指導する講師との検討を重ねながら，個々人とのコンタクトが取りやすい人数で実施していくことも求められると考える．

表 2. バレーボール教室参加者全体の満足度

	mean	SD
今回のバレーボール教室に参加してよかったか	4.78	0.69
技術の指導はわかりやすかったか	4.75	0.70
会場の立地は良かったか	4.80	0.61
会場内の環境は良かったと思うか	4.73	0.71
講師の方とうまくコミュニケーションが取れたか	4.56	0.75
実施時間はちょうど良かったか	4.60	0.72
今後もこのようなバレーボール教室をやってほしいと思うか	4.68	0.73
今回の教室で学んだことは今後に活かせると思うか	4.73	0.63
総合的な満足度	4.63	0.74

続いて，参加日毎の満足度を明らかにするため，開催した 3 日間においてバレーボール教室実施に関する項目の平均値を単純集計で確認したほか，一元配置分散分析にて比較を行った（表 3）．まず，総合的な満足では 1 日目 4.58，2 日目 4.70，3 日目 4.67 と全ての日程において高い値を示しており，中でも 2 日目が最も高い数値を示していた．また，バレーボール教室に関する項目では，「今回のバレーボール教室に参加して良かったか」，「技術の指導はわかりやすかったか」，「会場の立地は良かったか」，「会場内の環境は良かったと思うか」，「実施時間はちょうど良かったか」，「今後もこのようなバレーボール教室を行なってほしいか」，「今回の教室で学んだことは今後に活かせると思うか」の項目において 1 日目のバレーボール教室が最も高かった．3 日目のバレーボール教室が最も高かった項目として「講師の方とうまくコミュニケーションが取れたか」が挙げられた．1 日目のバレーボール教室は前述の通り，リオデジャネイロオリンピック女子日本代表の佐藤あり紗氏が講師を務めたことが，練習の内容や実施時間，今後の発展性や継続性についての項目で高い数値を示した理由であることが考えられる．また，「会場内の環境は良かったと思うか」という設問においては本調査項目の中で唯一有意な差を示した．1 日目の会場は富山市内の公営体育館を使用して実施されたことから 8 月という開催時期で非常に暑さが懸念される中，冷房完備の施設で実施できたことが今回の結果を示した要因として考えられる．今後は講師の質や経歴はもちろん，会場内の環境面にも配慮した実施が重要であり，これが少なからず満足度にも繋がってくることが想像できる．また，3 日目のバレーボール教室では富山高専のバレーボール部員が講師を務めた．部員が講師を務めることは，指導の技術面で課題があるものの，指導人数面の部分で参加者 1 人 1 人とコミュニケーションをとりながら練習を進めることが可能となる．このような背景が，講師とのコミュニケーションの観点で高い満足度を示した要因であることが推察される．今後，新たなバレーボール教室の形として部員全体が講師となり，1 人 1 人の参加者と密にコミュニケ

ーションをとりながら展開していくことも非常に重要な視座となった.

表 3. バレーボール教室開催日ごとの参加者の満足度

	1日目		2日目		3日目				
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	*F*	*p*	多重比較
今回のバレーボール教室に参加してよかったか	4.87	0.43	4.65	0.99	4.78	0.67	0.614	0.545	
技術の指導はわかりやすかったか	4.90	0.30	4.55	1.01	4.67	0.71	1.639	0.203	
会場の立地は良かったか	4.94	0.25	4.60	0.88	4.78	0.67	1.935	0.154	
会場内の環境は良かったと思うか	4.94	0.25	4.40	1.05	4.78	0.67	3.811	0.028	2日目＜1日目
講師の方とうまくコミュニケーションが取れたか	4.58	0.72	4.47	0.84	4.67	0.71	0.223	0.801	
実施時間はちょうど良かったか	4.71	0.46	4.40	1.00	4.67	0.71	1.184	0.313	
今後もこのようなバレーボール教室をやってほしいと思うか	4.81	0.48	4.50	1.00	4.67	0.71	1.093	0.342	
今回の教室で学んだことは今後に活かせると思うか	4.87	0.43	4.65	0.81	4.44	0.73	1.892	0.160	
総合的な満足度	4.58	0.85	4.70	0.57	4.67	0.71	0.166	0.847	

4. まとめ

本報告の目的は，富山高専が主催し実施したバレーボール教室を通した地域貢献が，参加者にとってどの程度の満足度を示しているのかを明らかにすることで，今後の事業展開の方法ならびにジュニアスポーツの発展に寄与する一資料を得ることであった．その結果，以下の点についての示唆が得られた．

・開催した 3 日間を通して総合的に高い満足度を得ることができた．

・バレーボール教室実施に関する項目について，3 日間を通し，技術指導・立地・実施時間・今後の継続性など高い評価を得ていた．

・1 日目のバレーボール教室が最も多くの項目で高い満足度を示しており，著名な選手を講師として招くことは重要な要素である．

・施設などのバレーボール教室の環境面の違いが満足度にも変化をもたらしていた．

この他にも，今回のバレーボール教室を継続的かつ持続可能な形で行うためには，3 日目のバレーボール教室のような部員が実際に講師となり展開していくことが重要であると考える．単独の講師ではなく，チーム全体で指導を行うことで 1 人 1 人とのコミュニケーションが密に取れ，指導する側と参加者双方にメリットが生まれるものと推察される．今後，このようなバレーボール教室を通した事業の課題や成果をさらに蓄積することにより新たなジュニアスポーツ活動の場を生み出すとともに学校部活動を行う上での一助となることを期待したい．

写真 1. 学生によるバレーボール教室の指導の様子①

写真 2. 学生によるバレーボール教室の指導の様子②

5. 参考文献（引用文献）

(1) 赤堀達也, バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～, 旭川大学短期大学部紀要, 51, 15-23,（2021）
(2) 青柳健隆, 小学校における運動部活動からスポーツ少年団への移行に伴う変化：地域移行を経験した教員へのインタビュー調査から, 体育学研究, 66, 63-75,（2021）
(3) 東川安雄, 総合型地域スポーツクラブの可能性と課題「働き方改革」と学校運動部活動のあり方を中心に, 人間健康学研究, 3, 137-141,（2020）
(4) 堀颯月, 総合型地域スポーツクラブと運動部活動の連携に関する研究:教員の多忙化問題に着目して, 公教育システム研究, 19, 51-64,（2020）
(5) 小峯秋二, 川西正志, 竹田唯史, 北海道中学校のソフトテニス指導者の指導価値志向と部活動の地域移行化ビジョン, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 14, 49-64,（2023）
(6) 中村祐太郎, 石丸出穂, 真野芳彦, 溝上拓志, 安部祐馬, 体育系大学におけるバレーボール教室を利用した学生募集の事例報告, 仙台大学紀要, 51(2), 43-49,（2020）
(7) 中村祐太郎, 仲野隆士, チーム型およびスクール型の中学生女子バレーボールクラブを同時運営するNPO 法人に関する事例研究：宮城県仙台市 NPO 法人会員の満足度に着目して, 生涯スポーツ学研究, 18(1), 65-75,（2021）
(8) スポーツ庁, 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインについて, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/1402678.htm,（2018）
(9) スポーツ庁, 学校の働き方改革を踏まえた部活動改革, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/1406073_00003.htm,（2020）
(10) スポーツ庁, 運動部活動の地域移行について, https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1.pdf,（2022）
(11) TEAMi 公式ホームページ, http://www.team-i.org/, (online)